

《新会員のひと言》

はじめまして、西村範子です。

このたび入会させていただいた西村範子と申します。大学では音楽(ピアノ)を勉強し、現在も指導や演奏など、ピアノに携わる仕事をしております。



ポーランドは作曲家ショパンやシマノフスキたちの祖国で、歴史的にも多くの出来事が起こった大変興味深い国です。残念ながら、まだ訪れたことはありませんが、数年前に知人のポーランド人一家と交流し、たくさん話を聞き、改めてポーランドへの興味が湧きました。美しい町並み、でもその背後に辛い歴史をたどってきたポーランド。その国の歴史や音楽、文化について深く知りたい、学びたいという想いから入会致しました。

ピアノを演奏するものにとって、ショパンはやはり特別な存在です。多くのはかなく美しい作品について、語り合ったり、深め合ったりできたら、と会への期待も膨らんでおります。これから皆様のお仲間に入れていただけることを、うれしく思っております。どうぞよろしく願い致します！ (にしむら のりこ)

安藤瞬と申します。

今から 22 年前、10 ヶ月という短期間ですが、家族でポーランドに住みました。当時は社会主義から民主主義へ移行して数年目の過渡期でしたが、社会主義にしる、民主主義にしる、自分にとっては初めての海外生活で、いま振り返ると、MacDonald's にテリヤキバーガーが無いことから始まって、背負ってきた歴史が刻まれた街並の違い、それに対する人々の認識の違いまで、世界の多様性を感じとった時期でした。



日本に戻って 22 年たち、もう一度ポーランドへ行ってみたいとときどき思いながらも、今は東京に住みポーランドとは物理的にも精神的にも遠い環境にいました。最近、父母がポーランド文化協会の東京例会などのイベントに誘ってくれるようになり、約 20 年後のポーランドの情報に触れて、変わったなと思う事も、変わらないなと思う事もありますが、やはり自分の年齢の変化による、違った見え方、感じ方を実感する機会となりました。

このたび入会させて頂くことは、自分の中で大切なポーランドの情報を更新できる貴重な機会です。どのように皆様に貢献出来るかまだ分かりませんが、今後とも宜しく願い致します。(あんどう しゅん)

李政美の歌声を聴いて

長屋 のり子

9 月 22 日、中島公園の豊平館(ほうへいかん)という美しい佇まいの歴史的建造物の荘厳なホールで「李政美」(イ・ジョンミ)を聴いた。二時間半、休憩を取らずに政美は歌いつづけた。何年ぶりか聴く生の政美！このたびのコンサートでも政美の声は存分に羽を広げてホールの天井に飛翔した。政美の歌声に出会うたび、私の身体の中のどこかが強く触発されて蠢(うご)めきたつ。そのたび私達の何かをひらかせてくれる声。誘うように、問いかけるように私達にやってくる声。比類なく美しく澄んだ響きを伴って私を揺さぶる。余韻がいまだ胸で揺れている。



十数年を遡って、私は東京の電通ホールで李政美に出会った。早世した兄、山尾三省(詩人)の一周忌の集いに、兄の詩を歌う真理ヨシコさんと李政美が招かれた。真理ヨシコさんの「水が流れている」も清冽な希望を響かせて素晴しかったが、政美の「祈り」は記憶の闇から光の方へ聴衆の魂をたぐり寄せるように歌いあげて鮮烈だった。その日から私は政美に魅せられつづけている。

政美は在日二世の韓国人である。歌と歌の間のトークに「そのこと」が少しさし挟まれる。それは私達に歴史認識や想像力が試される痛点だ。促すように問いただすように「そのこと」がやってくる。その胸の痛みに手をおきながら、私達は聴く。政美の強くたおやかに繊細なそして透きとおる声を聴く。会場を席捲したアラン。

ポーランドのシャンソン=パルチザンの歌「今日は帰れない」も丹念に、そして誠実にその切ない思いが歌われた。舞台の中央にすくと美しく屹立して、帰って来られなかった兵士達の無念の思いを、憑依したように政美は歌いあげた。残忍に他国に蹂躪されながら、歌に生まれ、歌に育った民族の逞しい歌声。あの夜、政美の歌声の私達に注いだものは「愛への祈り」「平和への祈り」だと気づく。

政美は私に口癖のように言いつづける。「祈るのは私のすることではない。私は歌うしかない。歌いつづける。死者にも、生者にも私の歌声を届けたい。ただひたすら誰かの心に思いを届けたい。」

李政美札幌・小樽公演の実現に力を貸して下さった北海道ポーランド文化協会の皆様に、李政美共々、深く感謝してやまない。(ながや のりこ)